



CONTENTS

Top Opinion

100号発刊を記念して

未来構想PF会長 林 康雄

1

[100号特別企画] 有識者が描く未来とは?

未来構想PF前会長
政策研究大学院大学 客員教授 名誉教授
鉄建建設(株) 代表取締役社長山本 卓朗
森地 茂
伊藤 泰司

2

VOICE

過去が予測した現代と2022年現在の未来予測

未来構想PF通信編集メンバー

4

今月の国際比較データ

7

PF書店/私のインフラ巡礼/編集後記

8

今号では100号を記念して、「未来」にスポットを当てた内容としております。



私のインフラ巡礼

～チャンギ国際空港 Jewel (シンガポール)～
アートと自然、建築が融合した新しい空間
(JR東日本 三縞宏徳さん、後藤祐樹さん)未来構想PFのホームページ
(HP) をご覧ください。会員はもちろん社会に大きく
開かれた「参加型」HPです。

未来構想PF

検索

で検索してください。

トップページへのリンクは

[こちら](#)

Top Opinion

100号発刊を記念して

未来構想PF会長 林 康雄

プラットフォーム通信100号の発刊、まことに
おめでとうございます。このプラットフォーム通信第1号は2013年12月
号に発刊され、その後、世の中の的には東日本大震災
からの復興やアベノミクス、コロナによるパンデ
ミック、オリンピック・パラリンピック、ロシアに
よるウクライナ侵攻等様々な事象がありました、
本年3月号をもって100号となりました。最近ある人のすすめで野口悠紀雄氏著作の「リモート経済の衝撃」
を読みました。コロナ禍によって引き起こされた日常生活の変化が一
時的なものではなく、在宅勤務、テレビ会議、オンライン医療、オン
ライン教育等により今後の日本人のライフスタイルに様々な面で大き
な変化が出てくるというものです。特に交通産業のダメージは相当な
ものであり、通勤・通学、ビジネス需要に顕著な減少傾向が残るもの
と思われます。鉄道事業者の大方の幹部は「需要は元には戻らない。
戻っても8～9割程度。」という認識を持っており、鉄道事業におい
ては損益分岐点を下げる必要が不可避であります。コロナ禍による生活スタイルの変化の他に、SDGs、サステナビリティ、
CO2ゼロエミッション、少子高齢人口減少社会等社会環境の変化も大きく、
10年後の2030年、30年後の2050年を見据えた対応をする必要があります。
まさに我々は大きな時代の変化点に立っていると言えます。このような状況のもと、未来構想PFとしてどのような認識でどのよ
うな活動をしていけば良いのでしょうか。私の私見を申し上げます、
今後の「鉄道と街づくり」については、昭和63年制定の多極分散型国
土形成促進法における業務核都市を中心とした、諸機能がバランス良
く配置された自立性の高い分散型ネットワーク構造の街づくりを目指
すべきであると思います。これをJR東日本管内の東京圏における駅周辺開発でいうと、東京区
部における開発は現在進行中の渋谷、品川、新宿と池袋程度で抑えて



おき、東京から30分～60分離れた、横浜、大宮、立川・八王子、千葉などの開発を充実させる必要があると思います。

また、このことは今後30年の発生確率が80%といわれている首都直下地震に対するリスク分散にもなります。

地方においてはコンパクトシティ、東京においては自立分散型ネットワークシティへの転換が今後のキーワードとなるのではないかと思います。未来構想PFは今後の「鉄道と街づくり」について一層の議論を深めるとともに若手技術者の育成に努めていく所存であります。

皆様のご支援とご指導を宜しくお願い致します。



[100号特別企画]

有識者が描く未来とは？



「未来を考える」キーワード

未来構想PF前会長 山本 卓朗

最近ある研究会で、“将来”と“未来”をどう考えますか？という議論になったことがあります。咄嗟に未来は将来のずっと先ですね、と言ったけれど、未来構想PFに居ながら、本当に未来を指向していたかというとはなはだ疑問で、せいぜい自分の命がある間くらいしか構想してなかったなと内心忸怩たる思いです。今回PF通信100号記念で『未来』を取り上げて頂けるとのことまことにありがたいことです。

未来を考えるとと言っても、荒唐無稽なSFの世界ではないから、キーワードの最初は、“歴史を踏まえて考えること”ですね。未来を語るには、歴史を知らなければ話にならない。冗談半分だけれど、私は50歳で人生を折り返しました。で、ついに19歳に。ますます若返って新鮮な発想をしたいと思うけれど、私の誰にも負けない売りは50年の歴史を知っていること。その良かったこと悪かったことを全部活かして未来を議論したいです。数年前に土木学会が100周年を迎えました。そのときこれからの100年ビジョンをつくることに。そのために100年間の歴史を総ざらいしました。過去の良かったこと悪かったことを考えると未来が見えてくるのではないかと思います。高齢化社会です、年寄りの重要な出番でもあります。

二つ目のキーワードは、“飛躍”です。

未来レベルで考えようとするとき、まず必須なことは、現在の考え方に捉われないこと、全てに疑問をぶつけてブレークスルーをめざすことでしょうか。人口減少は確かに大きな課題だけれど、狭い国土に1億人いなければいけない理由はないし、減少するメリットもあると考えるべきです。コロナで地方分散があらためて叫ばれているが、東京一極集中のメリットについても議論しないと地方の活性化だけが進むとは思えません。飛躍と共に“超”という言葉も大事ですね。情報化、国際化、脱炭素化についても、超情報化、超国際化、超環境と言った時に何を想像しますか。超のレベルになった時、当然行き過ぎのデメリットも顕在化してくるでしょう。デジタル化の急伸で、電力需要が数十倍に膨れ上がるとの想定があり、再生エネルギーの課題も浮き彫りになって、既にEUで次世代の原子力発電を目指す動きが出ています。とにかく頭を柔らかくして、考えを“飛躍”させないと未来は拓けないのではないかと思います。

最後の課題は、基本として“豊かな未来社会とは何か考えること”です。効率化は大事ですが、経済競争と関係ないところでは、日本の風土に合ったアナログ的な文化や制度を残すことを考えたいですね。日本に来た外国人が日本人の現金主義にびっくりするとか。私もSuicaと現金を併用してとても便利な生活をおくっています。

国土構造の改変と地域交通システム

政策研究大学院大学 客員教授 名誉教授 森地 茂

人口減少に伴い、わが国経済は縮小し、国民も経済的に貧しくなるかの議論が横行しているが、それは間違いであり、人口も生産年齢人口も減少率は年0.5%程度なので、生産性向上が1%あれば、貧しくはならないのである。高齢者の消費減少分を差し引いても、経済成長は可能なのである。そのためには、デフレが止まることと、地方の活性化が要件であり、それができると国民が信じることに日本の未来はある。

1. 将来の姿としての2層の広域圏

地域活性化の鍵はアジアの繁栄を如何に地域に取り込むかにあり、アジア向けのサービスや商品開発、インバウンド観光、アジアからの



投資、アジアからの留学生とその定住などである。かつての一村一品運動の国際版である。

全国的には豊かさが維持できても、過疎集落では人口減少以上の生産額をあげるのは困難である。したがってどのような広域圏なら経済成長できるかが問われるが、欧州の多くの国と同等の人口を有する北海道、東北、九州など広域地方圏なら国際空港や港湾、拠点の大学などもあることがヒントになる。まさに道州制の広がりである。

一方、小さな自治体では、医療、商業、教育など生活サービスを維持できず、多くの人々はそれらが集約された地方都市に住み、農業従事者をはじめ過疎地で働く人々も通勤するようにならざるを得ない。北欧諸国やカナダの地方部のような住まい方である。この生活拠点都市として、県庁所在都市や、地方の中心的都市すなわち、人口20-30万都市とそこから1時間程度の圏域単位でなら生活サービスの維持が可能ながヒントになる。人口規模や圏域の広さについては議論の余地があるが、定住自立圏構想が将来の姿であろう。

2. 地域交通システム

しかし、高齢者の多い地方の現状からこのような将来の住まい方に移行するのは容易ではない。この移行期の人々を支えるのが、自動運転による公共交通と移動販売車、遠隔医療などの技術である。

地域交通システムは人口減少で存続の危機にあり、政策転換が迫られている。人件費が60%、管理費が25%を占めるバスサービスで、車両も公的負担とし、自動運転で運行頻度を上げ、利用者が増えれば、現在の10-20%程度の運賃でも運行可能となる。欧米の大幅な補助金による地方交通に比べ効率的に適正なサービスを維持するためには、年間乗車券に対する利用者負担と自治体の負担を前提とする国の補助制度が望ましい。JR東は三陸地域のBRTのサービス維持に加えて、それ以外のバス路線の自動運転化も技術的に支援して、鉄道駅へのフィーダー交通のサービスレベルをアップし、その結果、運行頻度の少ない鉄道よりも便利なバスへの理解を深めたい。同時に生活拠点都市の駅周辺への各種機能の強化を図り、結果的に需要の少ない鉄道線区のBRT化が進んでいることを目指したい。

2040年の駅空間の創造へ

鉄建建設(株) 代表取締役社長 伊藤 泰司

未来構想PF通信100号の発行おめでとうございます。また、記念号へ「未来について」の寄稿依頼をいただきましたが、拙文となりましたことご容赦下さい。

今年が鉄道開通150年の記念の年です。今までの鉄道の歩みを振り返りますと大局的にはひっ迫する輸送量をさばくことが中心でしたが、昨今は感染症対策や人口減少にどう対応しながらサービスを提供し、経営を維持するかに焦点が当てられています。

もちろん駅においては、様々なサービス提供、バリアフリー等駅利用者への機能向上に努力がなされてきましたが、経営を支える輸送量自体が急減する逆風をどう乗り越えるかが、将来を展望する上で課題となっており、サービスダウンとなる運転本数の減、駅の無人化、サービスのロボット対応などが話題になることが増えてきました。

一方、道路交通に目を移すと、国土交通省からポストコロナを念頭においた2040年ビジョン「道路の景色が変わる」が提言され、その中で「人々の幸せにつながる道路」を政策の原点に置いています。また、令和4年度の道路局方針に「ユニバーサルデザイン化の推進」があげられ、全国の主要な鉄道駅舎周辺の道路における高齢者、障害者等を対象とするユニバーサルデザイン化の推進、自転車通勤の導入促進等があげられています。

鉄道各社もシームレスなネットワークの構築、駅の地域拠点化等为目标として施策を進めていますが、これからは、鉄道と道路のインターフェースをどう強化・拡充するかが今まで以上に問われることとなります。鉄道の多くは民営で、道路は官なので今まで各々のテリトリーを意識しながら努力がなされてきましたが、今後は「人々の幸せにつながる交通」を「まち」の中でどう実現するかについては官民の垣根を越えて協調を深め、日本を生活しやすい国にしていかなければなりません。

高齢者の足の確保、自転車と鉄道の連携施策などは、まだまだ十分な対応がとれているとは思われません。今後、道路空間の利便性が加速してくると思われれます。接点である駅のスペースがその街を体験したり、憩える場として提供されたり、交流を活性化させる仕掛けづくり、高齢者のシームレス移動をどうつくるか等、将来の鉄道の魅力を高めるためにも「2040年の駅空間の創造」に官民あげて取り組まれることを大いに期待したい。



VOICE

過去が予測した現代と2022年現在の未来予測

未来構想PF通信編集メンバー

私たちはなぜ未来を予測したいと考えるのだろうか、おそらくそれには2つの意味がある。一つは「リスクを低減したい」ということ。未来にどのようなことが起り得るか、それを予め知ることができれば影響を最低限に抑えることが可能になり、地震や異常気象などによる災害リスク、地政学的変化に伴う国際関係リスク、株価や為替リスクなどのファイナンスリスクなどを少しでも低減させることができる。そして二つ目が「ベネフィットの最大化」だ。「リスク」と「ベネフィット」はある意味で対となるもので、未来の状況を見通すことにより、今後得られる便益を最大化できる。新商品開発や新規事業へのチャレンジは、未来の変化を見据え、そこに潜在的に存在するマーケット・ニーズをいち早くつかみ取ろうという行動に他ならない。

■明治時代の未来予測

平成17年版科学技術白書の中で、1901年（明治34年）1月の報知新聞に掲載された「二十世紀の予言」が紹介されており、23項目中『かなりのものが現実となっており、驚きとともに感銘深い。』と記されている。実現した項目の事例としては、「無線電信電話」「遠距離の写真」「7日間世界一周」「暑寒知らず」などが挙げられている。これらをより詳細に見ると、3つの特徴が浮かび上がってくる。

- ① 23項目がすべて100年前の人々の欲求に深く根差したものであること
- ② 実現した13項目は主として電気・機械・通信・エネルギーなどの産業革命以降の技術革新をベースとしたものであること
- ③ 実現しなかった7項目は環境と医療・生命科学に関すること

「人々の欲求」と「技術をつくりだす努力」とが一致したときに、人類は100年という時間を有効に使って夢を実現させたことになる。長期にわたる技術予測で留意すべきは、「技術の進歩の予測」よりも「人々の欲求の強さ」にあるといえる。そして「環境と医療・生命科学」の課題は21世紀に持ち越されたことにも留意すべきであろう。



二十世紀の予言

No.02

今から100年後、社会はどのように変わっているだろうか。人間は未来を完全に予測することはできないが、その未来に、科学技術が大きな影響を与えることは否定できない。

およそ100年前の明治34年（1901年）1月2、3日の両日にわたり、「報知新聞」に23項目に及び「二十世紀の予言」が掲載されたが、以下に示すようにかなりのものが現実となっており、驚きとともに感銘深い。

写真電話

・電話口には対話者の肖像現出するの装置あるべし → テレビ電話

七日間世界一周

・十九世紀の末年に於て少なくとも八十日間を要したりし世界一周は二十世紀末には七日を要すれば足ることなるべくまた世界文明国の人民は男女を問はず必ず一回以上世界漫遊をなすに至らむ
→ 飛行機など高速交通機関の発達により、人の移動、物の流通が拡大

暑寒知らず

・新器械発明せられ暑寒を調和する為に適宜の空気を送り出すことを得べし阿弗利加の進歩も此為なるべし
→ エアコンの発明により空調がされる。

○その他の予言で現実となったもの

- ・無線電信及電話
- ・遠距離の写真
- ・植物と電気
- ・人声十里に達す
- ・電気の世界
- ・鉄道の速力
- ・市街鉄道
- ・自動車の世
- ・電気の輸送

○一部が現実となったもの

買物便法

・写真電話によりて遠距離にある品物を鑑定し且つ売買の契約を整へ其品物は地中鉄管の装置によりて瞬時に落手することを得ん
・サハラ砂漠の灌漑

- ・空中軍艦空中砲台
- ・鉄道の連絡
- ・人の身幹（身長）

○現実となっていないもの

暴風を防ぐ

・気象上の観測術進歩して天災来らんとすることは1ヶ月以前に予測するを得べく天災中の最も恐るべき暴風起らんとすれば大砲を空中に放ちて変じて雨となすを得べしされば二十世紀の後半期に至りては難船海嘯等の変無かるべしまた地震の動揺は免れざるも家屋道路の建築は能く其害を免るるに適當なるべし

人と獣の会話自在

・黙語の研究進歩して小学校に黙語科あり人と犬猫猿とは自由に対話することを得るに至り従って下女男の地位は多く犬によりて占められ犬が人の使いに歩く世となるべし
・野獣の滅亡

- ・蚊及び蚤の滅亡
- ・医術の進歩
- ・幼稚園の廃止

（出所）平成17年版科学技術白書





■さまざまな識者が2020年までに実現できると予測したこと
ネットニュースサイト「カラパイア」(<https://karapaia.com/>)
で、2019年12月30日に興味深い記事が掲載された。タイトルは、
『さあ、答え合わせの時間だ。2020年までに実現されると予測され
ていた17のこと』。詳細は上記サイトをご覧くださいと思うが、簡
単に紹介すると、下記のような結果であった。「一部あたり」や「惜
しい」等の評価も「あたり」にカウントすれば、「あたり」「はず
れ」は概ね五分五分といったところか。

予測者	予測年	予測	結果
1 AIの権威レ・カートゥイル	1999年	平均年齢が100才になる	はずれ
2 AIの権威レ・カートゥイル	1999年	桌上コンピューターが消えてしまう	一部あたり
3 AIの権威レ・カートゥイル	1999年	本が無くなる	ほぼはずれ
4 AIの権威レ・カートゥイル	1999年	監視社会の到来	あたり
5 国際食糧政策研究所	1994年	世界人口が80億人を突破	惜しい
6 未来学者ビーター・シュルツ、ビーター・ライデン	1997年	世界最大の経済大国は中国となる	はずれだがその日も近い
7 AIの権威レ・カートゥイル	1999年	自動運転車の実現	はずれだが惜しい
8 英国のコメンテーターのハミッシュ・マクレ	1994年	定年が70才になる	はずれだがそんな雰囲気はある
9 未来学者ビーター・シュルツ、ビーター・ライデン	1997年	中国が民主化へと歩みだす	はずれ
10 ビルゲイツ	1999年	パーソナル・デバイスの普及	あたりに近い
11 未来学者ビーター・シュルツ、ビーター・ライデン	1997年	数か月給油の要らない車が誕生する	道半ば
12 ハーバード大学、WHO	1996年	心臓病とうつ病が二大疾病に	はずれ
13 IPCC	1995年	気温の上昇	あたりに向かって進行中
14 NASA	1996年	人類が火星に到着する	はずれ
15 数学者D・G・ブレイン	1968年	反重力ベルトが戦争を変える	はずれ
16 スタンフォード大学チャールズ・スカーロット教授	1968年	原子力が天然ガスにとって代わる	はずれ
17 社会学者イェイル・デ・ソラ・アール	1968年	ナショナリズムの衰退	はずれ

(出所) ネットニュースサイト「カラパイア」(<https://karapaia.com/>)を編集

■昔の人が考えた未来予想図

ネットニュースサイト「カラパイア」では、他にも昔の人が考えた
未来予想図を紹介している。興味深いものをいくつか抜粋する。

1910年に描かれた遠隔操作によりロボットが
活躍する建築現場



1930年代ソビエトが予想した
交通システム



1960年代の人が予想
した自動運転車



(出所) ネットニュースサイト「カラパイア」(<https://karapaia.com/>)より抜粋

■ノストラダムスの大予言

フランスの医師であり占星術師ノストラダムス(1503~1566)は、
1555年に特集「予言集」を出版、日本では「ノストラダムスの大予
言」の名で知られている。この本は942の四行連詩で構成され、それ
ぞれが未来を予言していると信じられており、ヒトラーの台頭から
JFKの暗殺など、様々なことを的中させたと言われている。

もちろんはずれた予想もある。予言集は非常に抽象的なことが書か
れているため様々な解釈が可能であり、解釈の仕方によっては内容も
異なってくる。「1999年7月に人類が滅亡する」とされた予言は、作家
である五嶋勉氏の解釈によるもので、海外では別の解釈もなされている。

■予言と予測の違い

未来を推察する言葉として「予測」「予言」「予報」といった表現
がある。

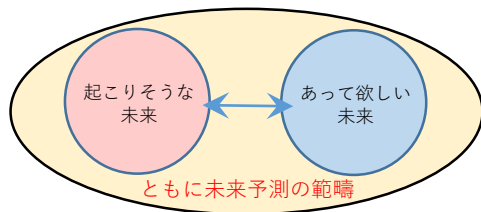
「予測」は、将来の出来事や有様を何らかの根拠に立って推し測ること。
「予言」は、普通なら見通せない未来の出来事・有様をこうなると言うこと。
「予報」は、事前に(推測して)知らせること。

確実に起きる(もしくは起きた)ことは「Fact(事実)」だが、
それ以外の可能性事項は、可能性の高低に応じて、高い順に「多分起
こる(Probable)」「もっともらしい(Plausible)」「起こるかも



しれない (Possible) である。こうした確実性の濃度による未来のあり方に加え、「あって欲しい未来・望ましい未来 (Preferred Futures)」の姿を考えることも重要である。一般にあって欲しい未来は「予測」ではなく「願望 (Preferable)」の範疇に入るが、近年のフューチャー・スタディーズでは、単に未来の姿を予想するだけでなく、「起こりそうな未来」(課題の残る未来)と

「望ましい未来」(課題の解決した未来)のギャップを確認し、そこに至るためのプロセスやアクションプランを考えることが未来研究の目的の一つになっている。



■未来予測の手法

われわれは望遠鏡で眺めるように未来を見通すことはできない。しかしその一方で、過去や現在に起きた事象を知ることができる。過去と現在の流れの先に未来があるのだとすれば、未来を知るための手掛かりは過去や現在に存在することになる。ただ、確実性が担保できる予測はほぼ不可能だが、「起こり得る未来の姿」は炙り出せるかもしれない。

そのような中、未来予測の手法として様々なものが開発されてきた。

- ① シュミレーション法 (定量的手法)：現実の対象や現象から特徴的な要素を抽出してモデル化し、コンピューターなどで模擬することにより、未来の状況を予測する方法。
- ② デルファイ法 (定量的手法)：専門家の集団に対して同一の問いかけを、結果を提示しながら繰り返し行うことで意見の収れんを図る方法。
- ③ シナリオ法 (定性的手法)：不確実な未来に対して大きなインパクトを持つ分岐として複数の可能性を設定し、それに至る過程を描く手法。急激な社会変化などが起きた際の迅速な意思決定が可能になる。
- ④ スキャニング法 (定性的手法)：現在利用可能な情報に基づいて、将来大きなインパクトをもたらす可能性のある変化の兆候をいち早く捉え、それがもたらすインパクトを様々な角度から分析する方法。
- ⑤ ビジョニング法 (定性的手法)：多様な関係者の参画により、現在の状況や課題を把握したうえで望ましい未来について議論し、長期

目標や戦略的目標を共有する方法。近年の我が国政府における未来予測の取組においては、文部科学省科学技術政策研究所「科学技術予測調査」をはじめ多くが本手法を採用している。

■2022年現在の未来予測

未来を考えることは、極めてクリエイティブで創造的な作業であると言える。誰もが知り得ていない未来の可能性を構想するためには、ある種の「直観力」や「アイデア力」、自分自身がこうした未来を築き上げたいという「願望」や「意思の力」も非常に大切である。客観的なデータや情報も大切だが、それを前提としつつ、さらに「オリジナリティの高い未来を構想する力」が求められる。そのような意味において、「ビジョン想像力」や「アイデアの力 (アイディエーション)」も重要と言える。

未来予測に関する取り組みは、政府・大学・企業等で広く行われている。

- ・文部科学省科学技術政策研究所「科学技術予測調査」
- ・総務省「未来をつかむTECH戦略」
- ・経済産業省・厚生労働省「未来イノベーションワーキンググループ」
- ・欧州委員会研究・イノベーション総局「プロジェクト・ポヘミア」
- ・ロイヤルダッチシェル「スカイシナリオ」
- ・日立製作所「ビジョンデザイン」
- ・三菱総合研究所「未来社会構想2050」
- ・みずほファイナンシャルグループ「2050年のニッポン」
- ・その他企業での取組「経営戦略策定に資する観点から」

これらから発信される各種予想を大きく俯瞰すると、デジタル化と地球規模課題への対応を背景とした共通した未来社会の姿として

- 医療・ヘルスケアの向上による健康寿命の延伸
- バーチャル空間での活動の拡大による生活の多様化
- AI、ロボットなどのICTの進展による産業の自動化・無人化の進展、データ産業・サービス産業の創出

が挙げられる。特に国内では、ICTを少子高齢化へ対応するためのツールとして最大限活用し、個人に合った医療・介護、多様性・包括性などの自分らしさの尊重、各地域が連携しつつ持続的な発展を実現していく社会の姿を予測している。

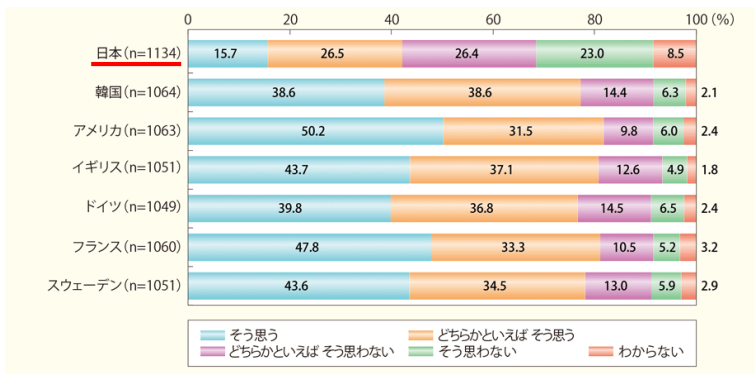


今月の国際比較データ

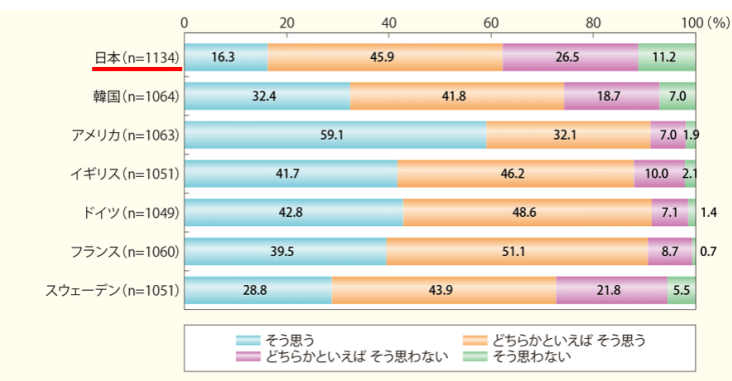


今月の国際比較データは、内閣府が平成30（2018）年度に実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」の結果を紹介します。未来ある日本の若者の意識について諸外国の若者の意識と比較し、日本の若者の意識の特徴等について気になる項目を取り上げます。

●自分自身に満足している



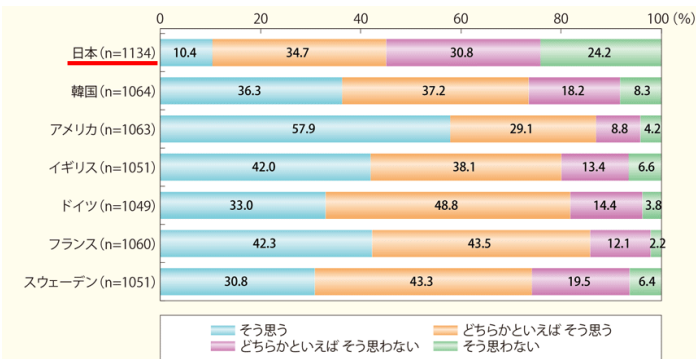
●自分には長所がある



日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自分自身に満足していたり、自分に長所があると感じていたりする者の割合が最も低い状況にある。

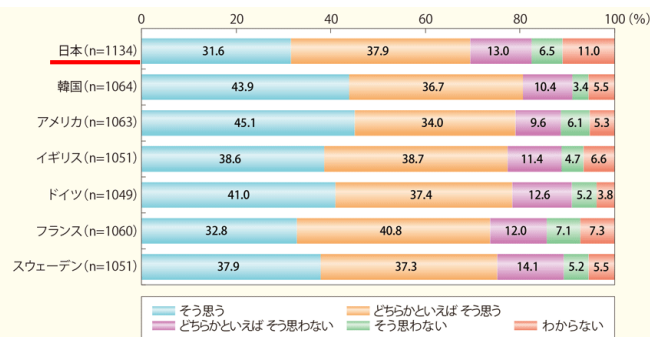
(出所) 令和元年度版 子供・若者白書 (内閣府)

●他人に迷惑を掛けなければ、何をしようと個人の自由だ

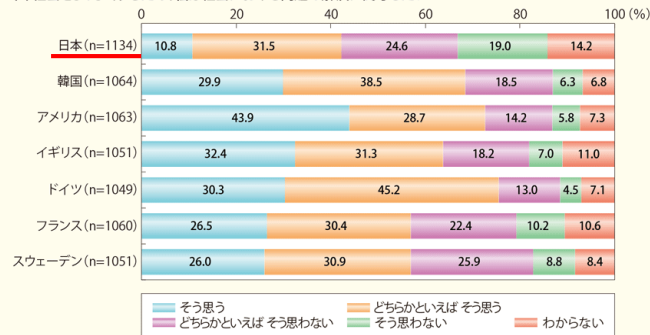


日本の若者は、諸外国の若者と比べて、他人に迷惑をかけないからといって何をしてもよいと考える者の割合は低い。

●政策決定過程への関与



(b) 社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい





PF 書店



本の題名をクイックすると、出版社の書籍紹介HPにリンクします！

① **未来予測入門** (上田篤盛著 講談社現代新書)

今月は「未来」に関する話題を中心に取り上げたが、本の紹介の第一弾は「未来予測入門」。元防衛省情報分析官である上田篤盛氏が編み出した技法を紹介している。未来予測というタイトルだが、これから起こるであろうシナリオを描いたものではなく、過去から現在の事例から連動して将来起こるであろう事柄を導き出すための手法や手引きが書かれており、事例紹介として小説風にかかれた20年後の未来の話もなかなか読み応えがある。著者曰く、「仕事ができる人、少し先を読むことができる人は、知らず知らずのうちに、未来予測のテクニックの一部を使って、思考・分析を繰り返しているのである」。

② **1980年代から見た日本の未来 2030年代を予測する視点**
(三浦 展著 イースト新書)

1980年代を知れば、2030年代が見えてくる。平成時代はバブル時代との対比で語られることが多いが、バブル時代は非常に特殊な時代であり、バブル前の1980年代の前半には平成時代につながる価値観、生活文化の芽生えがあった。同書では1980年代の前半にスポットを当て、そこから平成の30年を経た現代につながるテーマを見つけ、近未来を予測していくという手法により、来たる2030年代を予測する「視点」に着目した一冊である。

③ **虚構の森** (田中淳夫著 新泉社)

SDGs (持続可能な開発目標) をめぐる議論が盛んな昨今だが、著者は立ち止まって考えるべきだと訴える。未来を予測するという点でも示唆に富んでおり、「終わりに 一行列の後ろを見るために」では、環境問題に対する現代人の姿勢を特急列車の自由席車両のドアの前のホームに並ぶ長い行列の人々に例えてわかりやすく論じているとともに、フェイクニュースなど自分に都合のよい情報にばかり耳を傾けがちな姿勢を改め、厳密に科学的なデータに寄り添う「論理的な想像力」こそが未来を予測するためには重要なスキルであると説いている。この「終わりに」だけでも、一般論として未来の予測に対する重要な視点を持たせてくれる一冊となっている。



私のインフラ巡礼



「チャンギ国際空港 Jewel」 (シンガポール)



2019年4月、劇的な成長を遂げているシンガポールのチャンギ国際空港に複合施設「Jewel (ジュエル)」が開業しました。地上5階、地下5階の建物内には、シンガポール最大級の屋内植物園や高さ40mの滝と共にスカイトレインが走行しています。昼間には上部のガラスから差し込む柔らかい光が滝に反射し、時を忘れてしまいそうな幻想的な空間を演出します。アフターコロナに、アートと自然、建築が融合した新しい空間体験をしてみたいはいかがでしょうか。

(文 JR東日本 三縞宏徳さん、写真提供 JR東日本 後藤祐樹さん)

編集後記

1922年にソ連が誕生してから100年、ロシアとウクライナが戦火を交える日が来るとは、誰が想像していたでしょうか。兆しを的確にとらえ、正しく未来予測することのいかに難しいことか。私には未来予測する力も何もなく、無力でしかありませんが、今は、現地で苦しんでいる人々のもとに少しでも早く平和な未来が訪れることを祈るばかりです。(H.T)

プラットフォーム通信では、メンバーの皆様の投稿をお待ちしています。

連絡先：未来構想 PF 事務局 大口

電話：03-4334-8157 メール：info@miraikoso.or.jp

〒100-6005 東京都千代田区霞が関 3-2-5 霞が関ビル 5F-28